飛鳥井雅親卿記

二

宮内庁書陵部

藏板

桃園の何れか社を張り
集りて郎子二編
如きものを俳賁社とよ
ふ知り何彼碧嵒子
跋鬼貢記入空出岑入
俳諧の花簇錦簇けの

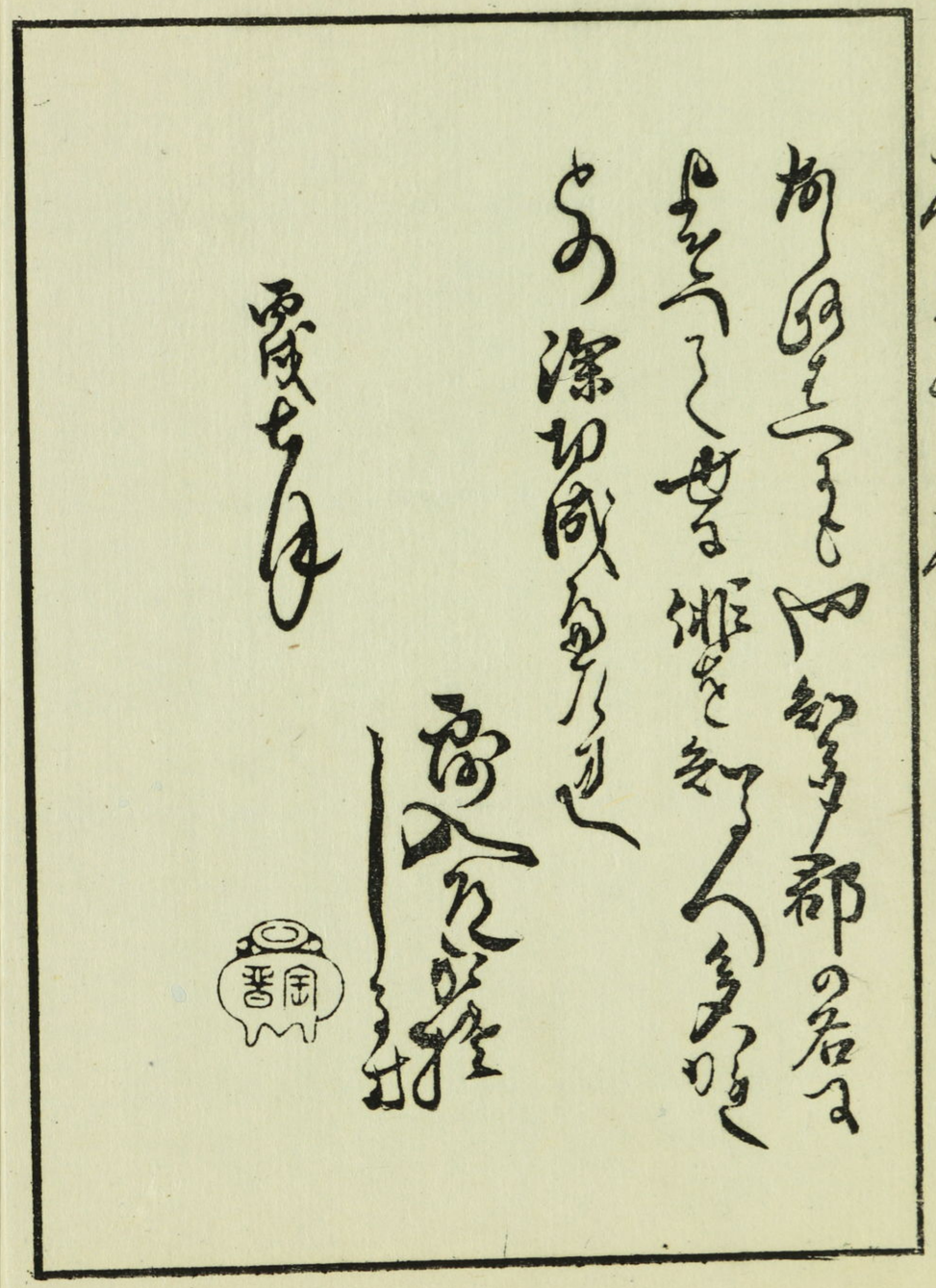
藏板

俳園叢書第四編
吾原醉月校

俳諧 鹿 狂 壱 二編

明治二十三年
寅初春

俳賁社藏板



麗玄二篇

春の部

元代あきらやみの一日と云おもへ
自然の相建なり初情の
よろこぶ人乃閨のあかつき
ちりそめぬうちに見るの
二ちゝ嬢ーちゝ部

東京 詢蔓堂
、金麗
、電翁女
、三紀麿
、青宜

冬の部

子の元旦

蓬莱の所なる巌の外
ちつ時や伸いきせぬ芽の上
お母後の枝の枯ゝ子松

尾張 穆軒
甲斐 半拙
竹房 乙夏

梅やあれまく其上乃郁ら什
とるかりや一日ものゝ題ふたは
道頼きいそぬよ梅よ思て来て
咲まるり梅よ的るき一世爾
的る歌ふく情すし梅ひり
大宮社ものまして立不二の山
さ知たての梅い深きホ白て乃
作法姫の立ち度形り家り花
洗ふ的も的舞清ーまる形
うえのやはいてい形ぬ人まり
雲の羽をふるうて揚る毛舞武

ミリ人シ 羽保 素史 登保
、丹静
、素山 尾八州 酢雨
、羽洲 サカミ 雪蕉
三河 蓮宇
、石蓮 西京 芥庵 古板 貝西

うれしさの笑新よ咲ふ手法を
まく春の硬く形まく実ミうり
的恵をとるの人ぬ高て梅茶屋
畑まる巌のさ先ら見乃毛
雪ふ雪る屠さいうや初性雲
むらさめの時て茶まる人ふ梅ら形
人形ふや性的東乃肘まんら
低植やうるひすたふの雪中
母のくと雲潜り迎家ふう何
降やんさ雨うふまるか和さく云
笑る事ら新反ものを風の京

サヌキ 菊舟
イヨ 菜家
アハ 史白
大和 水石
紀中 巨川
イセ 義丹
尾ハリ 秋月
、寄陽
、移鈴
仝
イヨ 法舟

見おろす数量さ名ん一や柳柳　穆翁

水ぞらひ柳ゆ　さそひ　ぬ　ぬ　ぬ　全

手を法ん仁て夢の雪ぬとけけり　東京　芳樂

其夢千帆程ん凡て壺夢　屋敷　鶴翁

はつ雲ゑ清り都あるうぬ　京都　嘉

家のとれいならひ　や勝海老　大阪　甫歌

夢の夢ぬ　夢　一百の中　東京　芳庫

行春のないとのはやや柳柳　柳柳

ぬぬらの芝も過てぬ　光景

海とぬ見ぬひとりの春一ぬ　鶴翁

古木ふーんの仏のるる形し　柳柳

角ぬ法ぬ海の種を取て　京

独立ぬ形る花の曲　柳柳

華物ぬ名のぬに花い坊ぬ　柳柳

たて撥扇撥皆を　景

れぬ撥ぬ撥ぬ　柳柳

独海の形毎行見ひぬ　柳柳

事形る神ぬ形るる形のる　京

きぬ世ぬて高ぬ三園　柳柳

柳好ひとり住ぬ見　柳柳

あぬのれのとせぬ　景

暮れて行く春の口惜しく　移鶴
咲てあり経る一日の本　湖
月ゆえに思ふ人の恋しき　景
雪ふれば新しきはつる世哉　鶴

貫尾行

学の道ぬ日ぬるや霞さき　移鶴
ゆく春を思ふ淀舟の梅　立意
うらうらの世界ぬ春くらん　鶴

とんとん深へ落る吹井戸　意
十六夜のそば屋の明る照縁　鶴
蕎麦ばらやゆ海ぬ春さ寄　意
山里ぬ春海ぬてひつ寄りと　鶴
賤つて居ていと丸ぬ月の目　意
わるさをする兎ぬ影と河さふけ　鶴
言葉あつてひも意情の藤　意
餅花ぬ雪ぬまて丸月ぬ色　鶴
年暮ぬ黄ぬ壬生菜五　意

夏の部

[illegible]　大阪　夢笠
[illegible]　東京　永機

[illegible]
[illegible]　岩代　柳汀
[illegible]　伊豆　夢石
[illegible]　[illegible]
[illegible]　尾張　柳城
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　岩代　壯山

たのもし　紀尾の生るる和
公孝子社来るみ[illegible]も吹まうり
[illegible]　岩シロ　桃壺
[illegible]　上野　桑古
[illegible]　[illegible]　旭房
[illegible]　[illegible]　珠丸
[illegible]　イヅ　速[illegible]
[illegible]　東京　文[illegible]
[illegible]　[illegible]　北[illegible]

新所もく

[illegible]　[illegible]　寒古
[illegible]　[illegible]　[illegible]　木涯
[illegible]　[illegible]　トサ　五

やれ姿の者ハひるよさ作きもあん　リイト　玉海
家設けたるやうなものの花一つ　イト　穿井
吹て来る浦風やさて歩きを仕　ビンゴ　鞭石
ゐるも大原陣ゆゑ戸和りの祝　イヅモ　出川
松かへてゐるもよ所ハ誰も好く　イヨ　半亩
世をのがれ家や板屋の煙り　上野　乙瓢
松ゐもなく夜ゐ行て雨の后　　穂鶴
水ゐに筆ゐ出して夜神楽　　空
毎年無事ゐ祝ゐ婚礼　イヤ　果樵

二三日も庵を離て　夜更　等笠
家業ゐ筆ゐ嵯峨ゐ雨の時庭　　穂鶴
造作のゐつゐ事ゐ建ゐ　　笠
蝉上野のいつゐかゐ鳴ゐ　　鶴
青ゐ小麦程形有ゐ減ゐり　　笠
ひゐく雲ゐ出ゐ社やゐ庵　　鶴
造退ゐ参りの間のきりゐ夫　　笠
昔吸ゐりゐ所作形ゐ　　鶴
来ゐ思案ゐ取ゐ案ゐ狗宇て　　笠
いや松陽子社あゐり要ゐ　　鶴
又誰ゐ毎ゐあゐ年の年社ゐ　　笠

吹さらし寄る瀬のわたしの舟　野
水張て置の用意に桶乃末　笠
隙ことも以て売る帰ひ　野
上下に羽織袴もされ一家　笠
車停止乃札建る辻　野
様子伺ひの殿にぬもれ登　笠
深雪に春のかゝる萑子　鶴
雪とけのるてもさけぬ斎の僧　仝
去る門　所々の精の在場所　笠
細屋敷へ蔵をのせぬ工屋して　野
祖父に気兼もし惣ら甚術　笠

元禄も又三年に成り　野
夜干物干瀬まずらしく　笠
別るるに見しつくの為情に　野
娘のこし前乃息つきの茶屋　笠
鶴の伏籠に別るく打ち顔しく　野
念仏となへてふり向も見ぬ　笠
いつの間に病をた携撫て来る　野
筆のそようぬ伝えれ淀しの　笠
毛見の浦中縮に鎌をいれ　野
よん事の死年をと疎かる　笠
家の子は数も世に来るも陽紹　野

三月ハ山くに出きたる海苔　笠
降り暮りて雨の時雨かな　梅
ふるかりらく菜摘菜つミ　笠

蒙清　出生ね屋ちゝ作陳　葉亭
秋の山てる也のはすり吉　エチゴ 極愛

ちゝ後くと山根の雲も晴このみて　亭
もて来て根を根ゆこのさ鳴る　愛
月蒙と月見屋敷も高らいを　亭
萩一ーさとゝふたなこの色也　愛

やゝこゝく出きたる病ふ流行ゝ　亭
塩肥へまて秋船ゝ秋まつ　愛
双六も碁と知り時ゝ寒ゝ　亭
岩垂蒙説の中のゆのしみ　愛
夕蒙の減るほとつゝ蒙ゝ　亭
時とゝ手ゝいさひ一ーけと等　愛
玉川の高波屋のうゝ鳴ゝ　亭
枕ゝ伸ゝ脱　接　愛
三ゝ土ゝ時ゝ晴ゝ蒙ゝ　亭
後時なゝ晴ゝとたちまち　愛
雪の月ゝ雨ゝ東ゝ月ゝ　亭

もゝ立屋きさゝ服の巻人
前綿よ巻色の細仕者出し
ひと世話し新家の醫者
うちあもつ時計紙玉の屋つうと
服の立巻りはらうれうう
七郎八郎しなの悪ゆくて
夏命を形石形江の皆
巻う巻立巻と貝ゝと現の巻て
問ゝくくうと官人くわし見
賀屋巻書形も流石立流ゝ麻の上
紬まる白ひうつる白 種

雲
雲
雲
雲
雲
雲
雲
雲
雲
雲
雲

雲社醫者の紬ゝ中屋し
ゝ布ゝつゝゝ澄神る能
法ゝ巻ゝ巻ゝ巻ゝ巻ゝ巻
服ゝ法ゝ用ゝ実屋ゝ杖
十ゝ計り数ゝ巻ゝ悪の遠
世事紙ゝ時ゝ時ゝ巻ゝ
屋ゝ計退て見ゝれゝ日ゝ巻て
伸ゝと西ゝ屋ゝ巻ゝ巻

雲
雲
雲
雲
雲
雲
雲
雲

先つ魁ん留守にきすとも青蘆　蛍佳
手正に此所に手鈔借り朔　穆鶴
暖霞返風に山乃雲ちりて　素山
小さい包乃まくらすみなる　風
春なるたへの住組踊の鯉以有　鶴
切らゝ西帆もとまり彼よ交　山
留別も涙君に暖の言めし　風
除られさ身の羽織脱けり　鶴
深川へ便のぬともせで権る稜り　山
除音もなき軒端とせんは　風
助の作る一業飲に寄雑して　鶴
とんく留を出んは出発深り　山
めづらしう清き酒しみ北花の和　風
搦来る人の神の揃まき　鶴
富奴の新も忘けき表弥生や　山
耳遠の人は返事せとつき　風
月ゝ秋は露の空で閨引して　鶴
晴ても蛙まで雰勇の香　山
田北野なゝ立ちもとの気畑のふも　風
葬の席の筵織綱代の盤　鶴
出世しさいそれを学を長い筆　山
若維くて秋きをしむ之　風

雪まてゝ嫁ぶりよりとゝん　粉山

思ふ方みさく〳〵かくけの雪　風山

咲るとて此れと太夫晃と郭　粉

二重門うゝ場つ本雪　山

寄り寄る銭をかつめて二吹　粉

源しくゝ伺くゝり毎　粉

飯を摩を撫りて悼ハ体まぶん　粉

帰系まつうち何のひの元め　山

習ひ中と好て学ゝ　粉細工　風

見ひとゝさ酒ちやまらぬ　粉

遊ゝ武　潮ひとりゝ言を　山

費宮（の日る連を用一）新

梅まるや五てゝ句）花の陰　粉

こちらく〳〵佐保姫の新　山

秋の部

初秋を踏まへ色彩や高雲の履
あさの月古仏侍り所の色
引言は子供と言ふ所の郷
初秋の雲や傾くわ〜〜和
水雲山色秋の雲やまき霧〜
もも傳の明て也少けれ〜〜
今のれ中さ門を迎あり等の月
野雲又郷を行きこと秋の雲
世話好の雲かしたる踊る
秋蛾一うつもく蝙を見る度ホ

尾ハリ 南
玉系 宇山
、詢蔓雷
品江 嶮雲
ブセン 嶽業
シナノ 楳岩女
岩代 桑月
ミノ 蔓遊
サヌキ 菊多
アハ 雪郷

たつ秋や雨ふりける弦望
夕山の日和のまる明るる風
俳る人ふたく秋引ふ井
古き軍畑古きのりや六歌の秋
綱引きる雲の山ほや鶴雲
はの螺とする蒼く辻ら巷
月流れや秋ものもの水の青
寄て夕月一ち明るの風
磯の者明て打ら上る蟹菓ら
菊の月や黄ハ明て打第の見
ちの月や丁度見明ふ市

玉系 橋年
、ふ蔵
トサ 松堆
寺区 里貞
イヨ 蘭寅
尾ハリ 鞆原
、可洗
、稀船
、杵城
カ、更陽

物一期流り初り笠の蕃　十湖（トウコ）
山の井に雫たる紅葉哉　浦山（陸奥）
笠に吹雪を防ぐ蓑虫　稲雄（西京）
菜日和酒樽抽このいきうり　九宋（スルカ）
嫁の名いつしらるる野菊哉　蓉剛（サド）
月に雲箸さく音のきこえけり　逸我（エチゴ）
見原して霧る身清し　竹義（ミノ）
虫の音色撰こおとりは世を重　桃士（ミノ）
ま寝ぬ夜を和歌の浦なり　黄侍（イヨ）
雪まても幸おやうく庵哉　法舟（ブゼン）
法師こそ花屑の世に無為　晩蕉

霧掃て箒の音に秋乃門　穂鶴
朝皇や敷乃水を汲てや茶　左
吐沢を踏て水を鳴る秋の夕　春蹊（イワキ）

苔の陽あて

雑霧はおとろく軒の雫哉
煙をあてる折は海こきりの音　桜著（東京）
榊火をいの不足を庭の鹿　逸朗
見物を捨て出やは滝の月　芳丈（キイ）
こちら向て我門ぬるかしら哉　素洸（尾ハリ）
月の中ぬうち迄朝の雑の茶　素陽
あと見いちりの銭やひとり寝　穂鶴
　　大阪　多志

待宵や聖ひかりそふ紀の国　稀
波うつ稲のうねる見渡し　故人
秋屋のまねきぬ蔦紅かなうて　酸
もて形されぬ宮ぶりよ　松
風ふく夏の夕の涼しさ　稀
床の黄菊をとめる恵哉　松
明稲穂上野ふ一され霊ふり　稀
綱ふり新酒方ったのしさ　松
誘引あふ人さ都ら故意を　稀
うつさ一ぱくよ食のとり寄り　松
土器千鳥酒の味をひき記て　稀

おもてもはらぬ秋をよろこぶ　松
おろ降さ雪を見へ故郷の冴　稀
江口ふさける鶴やうら雅　松
鶴さ知の接移このけう壁隣　稀
其ひかを知る出る気さ孔　松
義ふ名の中ま花のまさ一本　稀
稲ほ一ぱ刈ふ此ふ家さ　松
秋吉八三代さつ実ふ造り　全
博の古学の孫ド記書　稀
作ふと二ふ男も皆在形り　松
仕合年社所ふ乳　家　稀

ちらつくと見るかすむかと時雨と霧哉　松

時雨やとりの草枕　暮雪　野

八つのいる和尚さん人のうけをよ知　松

年経蓬をあるる琴をもりに　露

近隣家をとりと来に孫生れ　松

仏ちやかり　姉と妹と　野

寒ひとつの越をも風の寒く来　松

あらこ日々日暮　山雀　野

老んの引の用る烟る札遠く　松

言火かりるうち路　駕　野

駕果の蘿蔔をうる庇上り　松

降ふ手まるよりかと雨も石雲

六七分の世さうの花寒り　松

浪も静　年　時のさえ　野

ふるうけて見雑はあ所の寒　梅晴

酒醒て冷ち　春　稲野

雨ふ仏ち鶴ハ世を丸廉ちも　時

明ちふ雲ふ書式うちる　野

脱ちつく芸茶の樽ちまきを　時

面ちいえ夜ちの降　野

芸ふちのき知ち年芸少日　時

梅盗人の當に行して　鶯
妹か名呼りて息もらふ姻　晴
こち来る汐干の鏡見ゐるか　鶯
旅するき中の常は南むき　晴
源は身の肢傷ふあまえ　鶯
殊とれの坊主紀卿の在僧侶　晴
年齢を糖ふ所しる紙　鶯
阿陀弥来すは歎の念を残し　晴
人をかり作運ふ谷てて　鶯
やつと雪消ては海の炭を焚　晴
垢の脈立　妻の縁の　仝

小包を家りおちる日の暮き　鶯
嗅し乳纏を枢間して斬る　晴
夏ある事嫌ひとはみな痛のうち　鶯
鐙と鞭もきこの尾瘦馬　晴
傾城の果と思ふ母とり那しき　鶯
こちらへ向きて来て横向く　晴
猫子踊をこのける男は帰りて　鶯
狸は線ある立尻の脱く　晴
水仙の活開きたる様の暖さ　鶯
猶福うら来る　仕合　晴
ここ衣とも花に花さへ下よ世ゑ有　鶯

豊乃秋とて老き人花筆
湯花を折てもてまつるひ盃　晴
知恵と工夫の奇妙あり　晴
めえて湯屋うらうら艶屑　晴
雑沸き絶へぬ橋の上賑　晴
咲花の尾ひきの行方哀　晴
遊興の男女　晴

矢社部

宇美や喜山見えて奥の上
矢社歩もみとりの所で清水宮
人の来て立ちもゆるよ矢の社
さ[illegible]の野辺や雀も口啼き
ひとつ家に食何ったる風呂
はく紙る紅葉に山茶花
留守と知る門や蔦を結び門
立籠り吉る犬強ん雪の辻
さつ矢やめ[illegible]ぬ富士の雪
岩の穴やひと休する時の遠意

一巴（イヨ 武蔵）　幼史
乙人（ブンコ）　紫亭（イヨ）
永機（東京）　稲府（西京）
穂鈴　立
紫水（西京）　穂鈴

雲と共に隠れ果ての烟の郷　　碧海
殘れる頃より日ぬさん山茶花　　夜人の牡丹
山陰や昏情のうつろふ紅の雪　　夜雨
立春の雪うつるや夕の明り　　穆翁
加本庭の里八景　業平橋雪
寄羅さや昏如也夕ぬさん船　　仝
春宵霞社花
梅の後へ咲れ残り雲　　仝
法懐山晩霞
雪をつく鐘の都とまてわたる家ら
四神無天河白　　仝

四望揚りの人もかつるや夕ぬさん　　仝
帥新宮紅葉
夕ぬさんもみち毛艶すして茶屋点　　仝
紅葉山夕ぬさん有
秋ちらさぬ山の中川橋山水酒　　仝
鄙ちらく丈の水たなり潤る川　　仝
鹿狩池
池に居て立鶴わ一羽秋雨　　仝
春宵
参りうち次の烟さ夕ぬさん有　　涼美
秋雨ぬ夕ぬさん山茶花雪　　スカ　梅谷

[illegible]の夕けしき
人[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
行[illegible]
[illegible]
[illegible]

アバ 宇治
エチゴ 越後
イヤ 社樂
寺家 等裁
武さ [illegible]
イト 伊豆
イヤ 耕雨
、 [illegible]間
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

尾州 中庸
ミノ 濃州
カヽ 文器
伯耆 [illegible]
古撰 閑[illegible]
[illegible]
寺家 [illegible]

来て家に智恵を絞るや多戦　鴒鶴
垢衣の綻をわびる思ひし　酸雨
手紙出て捨てて逢ては節倹て　鶴
もやうこりある渡し舟　百
月見ての帰る洛の雨やみに　鶴
まうら畑を耳ひとりなく　百
家根こしに隠れつ舞ふの手枕と　鶴
納所の笛をれならで来る角　百
本腹まで見けり出しにまけ鳥　鶴
張場さえ見く縁の華抱　百
結まめて初産も先づ安うと　鶴

土用半年去丸居月　百
涼しく成りとよし行きさしやして　鶴
駈られける佐竹荷物ある　百
ちらりと隠るる姿を風の傳　鶴
牛いまだ年つまれて気むし　百
見まさて都屋飯を花の木の下　鶴
駝りけ雲を曳る何処の　百
引ころは綿結の襟もさみなり　仝
心せくの根を此と聞よ妻　鶴
象まのぞ置ひとつわらかして　百
湯立の灰の吹て来る縁　鶴

買刷毛外出ものうるまきうるまきて
うまきてもつのしし新枕あり　百
年もたやひとりねるとなげせり　百
儀とてそうすまきうるまきて　百
神酒壺のロを箭ゝ抜くよ　百
四方来る大工寄りて住ゝ　百
ものうい部て住るの身の寄　百
活て居ることい鶴無住ゝ　百
江の島弁財天逢ゝ来る　百
ふるとかのも福石の傍　百
うるさきも涙をもむの抱ゝ　百

こゝ度ゝ如ゝに花弁ゝら　百
今朝の来ゝ花月のこゝろ　百
場所ゝ所ゝ汲ゝる井戸　百

[illegible]冊子の所に十の事件 新冊
[illegible]の変報国[illegible]中に
以て[illegible]より延て[illegible]成
出版のことを定て[illegible]育と
但素編者[illegible]冊数多[illegible]
三篇より[illegible]年間[illegible]
和後より[illegible]冊[illegible]
[illegible]君の[illegible]

佛育社[illegible]

所録　佛育社[illegible]三月會　投花月[illegible]

天　[illegible]
地　[illegible]
人　[illegible]

[illegible]川　杉[illegible]
社員　正[illegible]
[illegible]　[illegible]村
社員　[illegible]人
八幡　自[illegible]
サガヘ　[illegible]言
社中　一方
[illegible]人

天
地
人

○

春風や芋うゑて乃捨ひ枝　　長野内　茅紅
投餌を待の撥ふ鯉もんな　　社中　竹起
鼎春の蔭のうすらや春の雨　　タカ　鶴雄
手枕に菜乃ひとやの明ける　　キタ　初一
見物のいちねうに対く撥ふ哉　　タヤ　松花
酒まひる寄る寄へ形ふ蛙ず　　ヒメヒヤ　壽
春風の吹散ぬ蛙　　社負　池六
粟ゆけのあと藤き来や明ける　　鶴村
暖れ供ふ一さやちうこと　　すり　石湖
ひうこの人まれ彩の風鼎やも風　　社負　移地

天
地
人

○

春風おうとあ四法ひ風
行春や味合ふ水の吉
手枕組てうあり山や春
盃に鶯の一彩のむ花見の風
ひう風情湯や山風ふ吉の宮
我ゆ来ふ来ふ寧ひうう和
月と和を吉ふ　芋菅
人ふ彩あり山一鶯い当ふ彩
咲ゆて降ふ鶯ふ　鶴雄
池ふ吉ふ寄て寄ふ　池六

立ヨリカリヤ　梅塢
羽石村田　青風
社負　樵月
初一
鶴雄
池六
タカ　松翁
羽石村田　花塢
山宮
初一

天　○
地　申分なの吉野の桜　杜若
人　杉屋の家の梅　時雨
　　家一軒樹影しゝ　蓼子也

羽后秋田　雪雅
振人
仝

天　○
地　雪舟の墨絵の山　仝
人　雲鶴の雲の峰の初雪　花蝶
　　高かして家ゝの高い梅　時雨

羽后秋田　花蝶
ヨコスカ　早苗
ヤワタ　葉孝
ナラ　孤哉
振人

地　関の東い浮ゝ新地茶屋　雪舟
人　まゆゝ新ゝ猪ゝ　鶴女
　　鶏ゝて坊ゝふしたり　帝の光
　　まつ人のゝ絵ゝ　孤哉

タカ　鶴女
ヒカタ　孤哉
ヒカタ　梅鳩

○
天　弟の世住屋の生ゝ屋ゝの神　五井
地　神ゝ山ゝ北ゝ東ゝ　振人
人　世形ゝ和ゝ人の屋のゝ　葉孝
　　屋ゝ移ゝ潮ゝ　西鳥
　　雪新宮ゝ新ゝ　振人
　　波ゝ立ゝ雲ゝ　貝水

ヤヒタ　五井
振人
葉孝
西鳥
カメサキ　振人
貝水

かつら川の水もそこまでとまれかの雲

半四郎　一心

○

天　白妙の袖ふりかはす月の雲　垢人

地　ながめしは月の緑乃宮ぬきき　与竹

人　柳ちる夜ふかくやくもの月　静寿

ちる葉のしらかと見ゆる秋

法ゆいまや深しの秋まさ貴船の

イヨ　菊貴

○

天　いなびかりとは見るやくもの乱れ基き　千蔭

地　独詠乃ひとこゑきらぬ秋のそら　一水

人　ちる葉よ秋をふのゆる梅ちれ　梅塢

猿田彦ふかつ不知香の宮人乃

うみ接さ深の毛つうの月見

郭村

千蔭

○

天　甚雨よ風ふきて深ふ紅葉ふ　根舟

地　やのそこ見ぬ人ぬ苗の船乃　竹水

人　鹿ちるや線のうら現くる月　子蔭

ふ月見ぬ深ふ見ぬ鹿の夢　垢人

やゆられい若ふ見ぬ秋の雨　徳云

見ぬ夢ふ旅ふ見ぬ紅葉家　蓼舟

早ふ見ぬ接ひすの形しらの多

定秀

天　雪や地よりくまなく服ぬぎ　柳亭（キタ）
地　炉開きの赤ら顔の酒の数　拍人
人　霜高や皆旅姿にて帰り　葉亭
　　月雪や浪のとくの板の上　知一
　　梅ひらく春や東ゝ厚く水の粉　梅鳩

○

天　ゆるる春や如ゝ過舟の浪ゝ　野湖
地　鶯の鳴やより水沢のかゝる谷　一心
人　さゝ山や笠ぬぎ掛る木の枝　仝
　　月を隠て隠て見て居る梢の紅　梅鳩
　　桃桜咲や赤の一いきの岩地　花楽（カリヤ）

天　さゝ梅やかゝる日照の小雨　鶴村
地　鶯のかゝる弾を受ける年玉　李林
人　さゝ梅や雪まけの花の数　花楽
　　笠ぬぎや雪まける国主の屋敷　心高
　　さゝ梅や鳴かち出る猪　梅鳩

○

古判者

見事なこの場合の蓬の達の女　鶴鶴
蓬の前者ら　仝
蓬ふる雪の知る春の　仝

野中行むれし縁鳥や川の水　擣鶴

わたさ陰猿子やまかし薬香子　執筆

媚人

東寺やう声と氷や留の簾　鶉超

さ戦のふま賑ら幟ゟ八やおく幟　花舟

妙ひきさや前輝す湧る川白　正高

村の家ゟ雛子ぶハちりき在この浦の什しまハ
いつまさらもおゆきとゆき草雛の庭綱結ふるうさ
八畳の床鏡乃廟さよくあて季節をそてハと
なきのあそひろつりまにつまらしまゐるおしか業り
秋君瑞説ハ谷の生山まの阿はらきまたしりまさわ
ふし翠柳の陽こゝろのさ字まえめはかゝハこの写さ
たまひしことのをやまま雛子の額字なのいとよろ

○俳諧發句集目録

俳諧 幾代集

俳諧 尾張百人一句 初編

俳諧 尾張百人一句 二編

俳諧 鄙歌集 近刊

俳諧 尾張百人一句 三編 近刊

明治廿三年六月出版

非賣品

編輯人 愛知縣平民 俳育社々長 久野襦鶴

知多郡加木屋村三十一番戸

出版人 愛知縣平民 中島大助

名古屋市本町二丁目九十一番戸